

---

# 嵐神の炎

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嵐神の炎

### 【Zマーク】

Z9085S

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

嵐神は炎を口の助手にした。そして炎は最後に嵐神を。ワーゲナーの二ベルングの指輪のヴォータンとローゲのお話です。物語やライトモチーフを参考にしました。

# 第一章

## 嵐神の炎

「炎よ」

片目の男がいた。右目がなく睡の広い帽子でその右目のところを隠している。黒い服にマントを羽織りだ。白く長い鬚と髪を生やした鼻の高い老人だった。その右手には槍がある。

彼はだ。目の前に燃え盛る炎に対して語っていた。

「聞こえているな」

「私を呼んだのは誰か」

炎のところから声がしてきた。

「誰なのか」

「私だ」

男はこう炎に答えた。

「私だ」

「ヴォータンですか」

炎は彼の姿を認めて言つてきた。

「貴方がですか」

「そうだ。私は今知恵を欲している」

「知恵を」

「そなたは知恵を持つていてるな」

炎を見ながら彼に問う。自分の前一面に燃え盛るその紅蓮の炎をだ。生き物の様に燃え盛るそれはだ。壁にも見えるまでに高く燃えてもいる。

その炎を見ながらだ。彼は言つのだつた。顔を赤く照らされながら。

「この世を照らす光を」

「照らすかどうかはわかりませんが」

「つむ」

「今貴方は炎を手にしてはおられない  
炎はこう、ヴォータンに告げてきた。

「それは確かですね」

「そなたを誰も手にしてはいない」

これがヴォータンの炎への返答だった。

「そうだな」

「確かに。その通りです」

「しかしだ」

ヴォータンは槍で炎を指し示した。そのつまでの言葉だった。

「私は今からそなたの知恵を借りる」

「私の知恵を」

「全てを照らし熱し焼く。その知恵をだ」

「そしてこの世を治められるのですか」

「この世は神々が治めるものだ」

「光の精達がですね」

「そうだ。そして炎よ

また炎に語りかけた。

「そなたもまた神になるのだ」

「ふむ。私が

「神になるのだ」

再度炎に告げた。

「そうしてそのうえでだ

「そのうえで」

「知恵を貸すのだ。私にだ」

「今この世は誰も治める者がいません」

炎からも言つてきたのであった。

「そう、誰もです」

「そして秩序がない」

「人間達も生まれたばかり。それでは  
治めるのは神々だ」

あくまで自分達だといつのだ。そしてだ。

彼は槍をさらに前に突き出した。右手だけで持ったままだ。

そのうえでその穂先を炎に触れさせると。炎は変わった。

赤い燃え盛るような服を着た赤い髪の男になつた。やや吊り上がり赤い目をしていて顔は細い。やはり鼻が高く何処か皮肉な笑みを浮かべている。

そうした姿になつてだ。そのうえでヴォータンに言つてきたのだった。

「さて、それではです」

「それではか」

「私は貴方に知恵を貸せばいいのですね

「そうしてくれるな」

「はい。ただ

「ここでだ。男はこゝも言つた。

「私にはまだ名前がありません」

「名前がか

「炎、強いて言えばそれが名前ですが」

「そうだな。それならばだ

「はい、それでは私の名前は

「ローゲか

ヴォータンはこゝの名前を出したのだった。

## 第一章

「」の名前でどうか  
「ローゲ、炎ですね」  
「嵐の神が炎の神を名付けた」  
ここで彼は言った。  
「それでどうか」  
「いい名前ですね」  
ローゲと名付けられた男はここでその笑みをやけに深くさせた。  
そのうえで、であった。  
その笑みでだ。こう言つのだつた。  
「ではその名前でこれからは」  
「知恵を与えてくれるな」  
「是非。ただ」  
「ただ。何だ」  
「若し人間達がです。今はまだ生まれたばかりの彼等が」「  
「あの者達がどうかしたのか」  
「彼等が今以上に大きくなりこの世を治められるようになれば」  
その時を仮定するのだった。  
「その時はです」  
「どうするといつのだ、その時は」「  
「私は炎に戻らせてもらいます」  
そうするというのだった。  
「そして彼等を照らし護つていきたいのですが」  
「私の下から離れてか」  
「はい、その時はです」  
こうヴォータンに話すのだった。  
「それはいいでしょうか」  
「神々がこの世を治めるものだ」

これはヴォータンの中では絶対のことだった。だがローゲはそれを否定している。これが彼には理解できないことだった。しかしだつた。

それでもだ。彼はローゲに對して告げた。まずは前置きからだ。

「その様なことはだ」

「有り得ないというのですね」

「そうだ、有り得ない」

実際にこう言ってみせたのだった。

「何があろうとも」

「この世が滅びようですね」

「そうだ、ない」

ヴォータンはまた言った。

「それはない」

「神々が滅んでもですね」

ローゲの今の言葉にだ。ヴォータンの左目がぴくりと動いた。そのない右目も同じだった。微かにであるがそれでも動いたのだった。そしてそのうえでだ。またローゲに応えた。

「知っているのか」

「はい」

ローゲは穏やかな声でヴォータンに答えた。

「この世の運命を。エルダから伝えられました」

「そうだったのか」

「それをもたらすのは何者か」

ローゲはこのことも話してきた。

「それを常に考えておられますね」

「おそらくはだ」

ヴォータンはその左目を動かしながら述べた。

「巨人、若しくは二ベルングだ」

「巨人か小人ですね」

「あの者達は常に我々に敵意を持つていてる」

「そしてとつて代わるうとしている

「だからだ。どちらかだ」

「そうですね。どちらも脅威です」

ローゲはここでは神々の側に立つて述べてみせた。ここであえて  
そうしてだ。あたゆることについて考えようとしていたのであった。

「巨人達は力を持ち

「二ベルングは知恵を持つている

「ならばですね」

また言うローゲだった。

「それへの備えもしなければ」

「備えか」

「どうやらその備えを配するのに私が必要ですね」

ローゲはヴォータンのところに一步出た。そのうえでまた話した。

「それではです」

「来てくれるのだな」

「人が神々の手から離れ彼等だけで生きられるようになるその時まで」

そうすると答えてだ。ローゲは神の一員になつた。それから長い年月が経つた。

それからだ。備えは築かれた。神々はヴァルハラを築いた。ローゲもその中に入った。

だがある日だ。彼はヴァルハラの門をくぐつた。そして何処かに向かおうとしたのだ。

## 第二章

その彼の前にヴォータンが来た。そのうえで彼に問つた。

「何処に行くつもりだ」

「何処とは？」

「そうだ、何処に行くつもりだ」

咎めるような顔になつてだ。ローゲに問うのだった。

「一体何処に行くつもりだ」

「時が来ました」

「こう話すのだった。

「ですから」

「去るというのか」

「はい、人の世がはじまろうとしています」

「人の世が、か」

「貴方は人との間に子をもうけられましたね」

ヴォータンを見ながらそのうえで話す。

「そうですね」

「知っていたのか」

「炎は何処にでもあるものですから」

己が司るそれはとつのだ。彼も炎の化身なのだ。

「ですから」

「だからか」

「だからか」

「その子供達、ヴェルズングの一族がです」

「・・・・・・・・・・・・」

「貴方はわかつていてそうされましたね」

「そう思うのか」

「私はそう見ています」

その赤い両目でヴォータンの左目を見ながらだ。そのうえでの言葉だった。

「あくまで私がそう見ているだけですが

「そういうのだな」

「はい、神々の中で貴方と私は

まずは彼等だというのだ。

「そしてエルダ。地の底にいるあの女神の三人だけが神々の運命を知っています」

「神々がこの世を永遠に治めるということをだな

「おやおや」

ローゲはヴォータンの今の言葉に拍子抜けしたように笑つてだ。  
そして言うのであった。

「そう仰いますか

「違うというのか」

「まあそう言われるのならいいですが

「そしてそのヴェルズングの者達がか

ヴォータンはローゲに問い合わせ返した。「こうだ。

「何かをするというのだな」

「人がこの世を治めるはじまりを築かれます

「そうなるというのか」

「おそらくは。そしてです」

「そしてか」

「その時に神々は黄昏を迎えます」

「そうなると。ローゲは話した。

「そして貴方はそれを避けようとしながら実は

「実は、か」

「その黄昏を望んでおられますね」

「黄昏を望む者がいるのか

「不思議に思われるかも知れません」

「その思っている者を見ての言葉だった。

「ですが確かにいます。貴方は人がこの世を治められるべきだとも

考えています」

「人にそんなことができるものか」

「さて。神々より満足に治められるかも知れません」

「有り得ないことだな」

「ですが既に動きはじめています」

「また語つローゲだつた。

「ノルン達の紡ぐ糸は」

「それに従いか」

「私は去ります」

ローゲは穏やかな声でヴォータンに告げた。  
そしてだ。恭しく一礼してだつた。

彼はヴォータンの前から去つた。そして最後にこう告げた。

「また御会いしましょう」

「黄昏の時にか」

「はい、その時にまた」

こうヴォータンに告げるのだった。

「御会いしましょう」

「楽しみにしている」

「自分で言つたかわからぬ。だがヴォータンは確かにこう  
言った。

## 第四章

そしてだ。そのうえで言つてだつた。

彼はローゲを見送つた。その後姿は次第に小さくなりそのうえで炎となつた。こうして彼はヴァルハラから去つたのであつた。  
それから暫く経つてだつた。

森の中でだ。小鳥がさえずつていた。

その下には一人の少年がいる。若々しく精悍で霸気に満ちた。その彼に聞こえるようにしてだ。

「この森の奥に」

「森の奥に？」

少年もその言葉に顔を向けた。見れば服も荒々しい。まるで人の世にいなかつたようにだ。

「この森の奥に何が」

「岩山がある」

じづさえずる小鳥だった。

「そしてその岩山は炎に囲まれ」

「炎に」

「そしてそれを乗り越えた時」

小鳥の言葉は続く。

「そこに女がいる」

「女？」

「その女を手に入れれば」

小鳥はさらにさえずる。

「その者は全てを得られる」

「女とは何だ？」

少年はそこからいぶかしむのだった。

「何だ、それは」

「行けばわかる」

小鳥はその少年に対してもう一度言つた。

「岩山に行けば」

「なんだ」

少年はとりあえずは小鳥の言葉を聞いて頷いた。そしてだった。  
そのうえでだ。彼はその岩山に向かうのだった。小鳥は木の枝の  
ところに止まつていていた。

しかしここにだ。旅人の姿の彼が来た。そしてだった。

「そこにいたのか」

「はい」

「どういうつもりだ」

彼はだ。小鳥を見上げながら言つた。

「何故ジークフリートに教えた」

「貴方の望みを適えただけです」

「私が」

「はい、貴方のです」

小鳥はローゲの声を出していた。そのうえでの言葉だった。

「貴方の望みを適えただけなのです」

「やはり知つているか」

「勿論。だからこそ」

声は笑っていた。小鳥はヴォータンを見下ろしながら話す。

「こうしてです」

「ジークフリートを行かせたのか」

「あの者ですね」

また言う小鳥だった。

「あの者こそがブリュンヒルテを手に入れ。そして」

「言つつもりはない」

「言わないというのですか」

「言つ必要があるのか」

「いえ」

笑顔の声でそれは否定する小鳥だった。

「それはありませんがね

「そうこうことだな」

「では貴方はこれからどうされますか？」

「どうするか、か

「はい。行かれますね」

「ひつ小鳥に対しても述べた。

「そしてそのうえで

「そこまでわかつてているのだな」

「長い付き合いでしたから」

小鳥の声は「」でも笑っていた。

「ですから

「それでか」

「はい、貴方も私の」とよく御存知なのと同じです

「それとか

「そうこう」とです。それなら

「うむ」

「また会こましょ」

小鳥の言葉は今度は恭しいものになった。敬意は確かにある。

「そして次に御会いするその時が  
「最後だな」  
「それで宜しいのですね」  
小鳥はこうヴォーランに問うてきた。  
「貴方は。それで」  
「それでいい」  
確かにそうだとだ。彼は言つのだつた。  
「思えばその為だつたのだな」  
「あの時私を御呼びしたのはですか」  
「そうだつたのかもな」  
こんなことを言つのであつた。  
「それでだ」  
「そうした考えはわかりませんでしたが」  
「それではだ」  
「はい、それでは」  
「また会おう」  
こう小鳥に告げてだつた。ヴォーランは踵を返して森の中に消えたのだった。  
小鳥はその後姿を暫く見送っていた。だが彼が消えて暫くしてからだ。何処かへと消えたのだった。後には森のせせらぎだけが残つた。  
少年は美女と巡り合い、旅の末殺された。そしてその身体が焼かれ美女もその炎の中に身を投じた。その炎こそがだった。  
美女はだ。炎をこう呼んだ。  
「ローゲよ」  
「う呼んでだ。そのうえで炎の中に飛び込んだ。消えたのであつた。

だが炎はそのまま燃え上がり天界に昇る。その時に天界を脅かさんとする「一ベルングの軍勢を焼きそして遂には。

ヴァルハラに迫った。神々はそれを見て逃げようとする。だが主の座にいるヴォータンはその座に座つたまま動かない。既にその前には薪がうず高く積まれてもさえいたのだった。

炎がその薪に迫る。そしてだつた。

ヴォータンはその炎に語り掛けるのだった。玉座に座つたまま。

「来たな」

「はい」

炎の中からローゲが出て來た。そうして彼の言葉に応えたのだった。

「お別れの時が来ました」

「そうだな」

「御聞きしますが」

ローゲは畏まった態度で、ヴォータンに問うた。

「宜しいのですね、本当に」

「何がだ」

「貴方を焼き尽くします」

こう、ヴォータンに告げるのだった。

「これから。それで宜しいのですね」

「その為に来たのではないのか」

今度はヴォータンがローゲに問うた。

「そうではないのか」

「それはその通りです」

ローゲもこのことは否定しなかつた。その通りだといつのだ。

「ですが」

「しかし、か」

「他の神々はともかく貴方は」

「私だけは違うというのか」

「この手で焼くには忍びないものがあります

ここでローゲは明らかに躊躇いを見せていた。そのうえでの言葉

だった。

「長い付き合いでしたから」

「愛着を持ったか」

「はい」

ヴォータンの言葉にこくりと頷いてみせた。

「その通りです」

「炎である貴様がか

「心がありますので」

「だからなのか」

「そういうことです。ここから去られては  
こうヴォータンに提案したのだった。

「そうされでは。そして何処かで一人過ごされでは」

「さすらい人としてか」

「それはどうでしょうか」

これがヴォータンへの言葉だった。

「如何でしょうか」

「それはいい」

「いいですか

「そうだ、いい」

これがヴォータンの返答だった。

「構わない」

「そうなのでですか、本当に」

「それが運命なのだからな」

「既にノルン達の糸は切れています」

「神々の運命が決まったということだな

「はい」

ローゲはまたヴォータンに答えた。

「そういうことになります」

「では私はだ」

ヴォータンは話すのだった。

「その運命の中に消える」

「そうされるのですね」

「そうだ、そしてだ」

「そしてですか」

「御前は炎に戻るのだ」

ローゲに対しても話した。

「そうするのだ」

「そして人間達を見守る」

「そうするのが御前の運命だからな」

「それに従えと」

「そういうことだ。いいな」

ローゲに對して告げた。

「ではだ」

「私の役目を果たせと」

「そうするのだ。今からな」

「わかりました」

ローゲも遂にだ。ヴォータンの考えを受けた。

そうしてそのうえでだ。炎の中に消えてだ。薪を燃やしヴァルハラを覆つてしまつた。

ヴォータンはその中に消えた。何一つ残らなかつた。

炎は彼もヴァルハラも焼き尽くしたうえで何処かに消えた。そしてそのうえでだ。人の傍にいるのだった。それは今も変わることがない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9085s/>

---

嵐神の炎

2011年5月1日22時25分発行